

巻頭言 授業研究の試み

教育学部長 木全 力夫

授業改善にどう取り組んでいるか、筆者自身のささやかな授業研究の試みを紹介し、読者からの御助言を賜りたい。ここに取り上げるのは、社会教育主事課程カリキュラムの総括的な科目に位置づく社会教育演習（3、4年次生対象、4単位）。到達目標として、理論を実践の中で確かめ、現状の中から課題を見つけ、課題解決への方途を探る力量を養うことと定めている。この目標達成のためには公民館や生涯学習センターなどでの実習が望ましいが、100名近くの履修者のための実習施設・機関との契約、事前の打ち合わせや実習期間内の指導を、専任教師が筆者一人しかいない本学の状況で行うことができない。そのような現実的な制約の中での演習であるが、できるだけ詳しい記録をつくり、改善を目指した授業研究を継続的に試みている。以下に02年度の概要を報告したい。

①実践事例をふまえながら理論的な追究を目指す。その前提として筆者自身が現場と連携して実践的研究を続けてきた。

②大学での研究と教育および社会的実践との環流を図る。20数年前に本学で社会教育演習を受講した卒業生A氏が、現在社会教育職員として実践している事例を中心に提起、先輩と後輩、さらに講座参加者の市民と相互に交流し学び合う。

③教育機器としてのパソコンの活用。上記のA氏は、市民講座の企画運営会議（6回）および講座（8回）の詳細な記録を作成し、パソコンに入力し、その資料を同僚の職員および参加者と共有し、その分析研究をしている。筆者もその実践記録分析研究にここ10数年間協力してきた。その関係で膨大な資料を本学の授業に活用することの了承を得た。フロッピーに入力した記録の分量は、A4判で合計223頁分、字数でいえば、1頁分1,762字として、総計で約393,372字に達する。学生はパソコン演習室でそれらの資料をパソコン画面で、あるいは一部プリントで読み、またEメールを活用して職員および講座参加市民と質疑応答をした。

④集中授業と多様な学習方法の採用。午後3、4時限（1時15分から4時30分）、全15日間（30コマ分）で実施。学習方法は、個人学習＝資料をパソコン画面で、あるいは一部プリントで読み、各自の課題を設定し、それに関連する図書、資料を収集して学ぶ。グループ学習＝34名の履修者を6グループに分け、個人学習の成果を報告しあい、集団討議する。全体学習＝各グループから学習経過を報告し、全体で討議する。授業の流れの中で適宜上記3つの学習方法を組み合わせた。

つぎに授業の自己評価を記したい。

①そもそも授業で取り上げた実践事例の担当職員および成人学習者である市民自身が授業に参加することは授業担当者への厳しい批評の機会となった。

②学生のレポートおよび感想文もそれ自体が、授業アンケートとともに授業への評価となる。今回は詳細な学習記録を読むことによって、学生たちは直接、講座に参加したかのような実感をもった。そしてその実感にもとづきながら成人学習者の理解、社会教育職員の職務内容について理解を深めたように思う。

③各自の追究のためにグループでの相互学習が大きな役割を果たした。当初、教師の側からその意義をあえて説明しなかったこともあり、学生たちはグループでの相互学習の意義に気付かなかった。が、実際の集団活動を通して、次第に相互に学ぶことの大切さを理解した。

④取り上げた市民講座が「働くってなに？」というテーマであったことから、学生たちは自ら

の就職・進路に結びつく課題として受け止めた。したがって市民講座参加者（40～50歳代の成人男女が多かった）の現実に根ざした切実な発言に触れて触発され、熱心な学習姿勢を示したものが多かった。いわば大学におけるキャリア教育としての意味も大きかった。

⑤講座の学習内容だけでなく、教育計画、実施方法など職員の職務内容について学んでいる。例えば第1グループでは、女性の視点から働く意義や社会的課題を追究しながら、結局は社会教育としての講座の企画、運営についても学んでいるのである。

*付記 この授業研究については、『創価大学社会教育主事課程年報』に連載し、同課程科目担当教員および学生、さらには全国社会教育職員養成研究連絡協議会に加盟する諸大学や日本社会教育学会会員に広く報告し関係者の批評を仰いでいる。



新入生向けの勉強法ガイダンスを開催

新入生向けの勉強法ガイダンスが「先輩が語る勉強法アドバイス」と題して、4月9・11日に行われ、2日間で300名を越える新入生が先輩(学部上級生・大学院生)の解説に熱心に耳を傾けた。内容も、予習の仕方とシラバスの活用、教科書の役割、ノートの取り方、語学の学び方、コンピュータの積極的使用、そしてオフィスアワーの活用など多岐にわたる。

ガイダンス終了後、学生が列をなして講師に質問する姿から、勉強に対する真摯な姿勢を見ることができた。質問の中には「講義計画書(シラバス)がまったく示されていない講義なので予習をしたくてもできない。どうすればよいのか」など、講義改善への要望も寄せられ、院生講師が苦笑する場面もあった。

このガイダンスに続いて、4月25日には、「ノートの取り方講習会」も開催された。約50名の学生が、ノートの取り方のアドバイスを傾聴し、その後簡単な実習に取り組んだ。講習会のアン

ケートでは、「講義にまとまりがないのでノートの取り方がまったくわからない」という厳しい意見も散見された。

本年度から経済・経営学部の基礎ゼミ導入をはじめ、大学全体で学生の学習スキル向上を目指している。これと同時に明確なシラバスの作成や講義内容の組み方といった教員の教育スキルの向上に大きな期待が寄せられている。



新入生にアドバイスする学部上級生

*教育・学習活動支援センターでは、今後「レポートの書き方講習会」を開催する予定

CETL所員一覧

<教育学部> 坂本辰朗(センター長)
<教育学部> 関田一彦(副センター長)
<経済学部> 神立孝一・小林孝次
<法学部> 宮崎 淳
<文学部> 金子 弘

<経営学部> 金子武久・岡田 勇
<通信教育部> 西浦昭雄
<工学部> 戸田龍樹・坂部創一
<研究所> 小出 稔
<WLC> 尾崎秀夫

L T D (Learning Through Discussion) 教授法ワークショップを開催

今年度第3回教授法ワークショップが、去る3月7日A棟530教室において開催された。前回10月30日のワークショップに講師としてお迎えした安永悟教授（久留米大学文学部）に、引き続きL T D学習法の紹介を戴いた。

冒頭の挨拶で若江学長はディスカッションを通した学習の大切さに言及し、L T D導入による学習の向上に期待を寄せた。経済・経営学部の先生方を中心に参加者50名をこえる大規模な教授法ワークショップは本学初である。

今回のワークショップは午前と午後の部に分かれており、午前ではL T D学習法の理論的概要が解説された。午後の部で、参加者を学生に見立てたL T Dの実体験が行われた。5人程度のグループが車座になって、手渡されたテキス

トを手し、協同学習のステップを体験した。

安永先生は、L T Dをさまざまな授業で試みられた経験と緻密な研究成果から、学生中心の学習法の利点を強調している。学生主体の理念を掲げる本学にとっても、学生の主体性を基盤とするL T D学習法を導入し、実践することは非常に意義深いように思われる。



L T D学習法ワークショップに参加して

本年3月7日、久留米大学文学部・安永悟教授を迎え、「Learning Through Discussion (L T D) 学習法 (ディスカッションを通した学習法)」のワークショップが行われた。

L T D学習法は二つの過程で成り立っている。一つは授業に参加するための準備、つまり予習の過程であり、もう一つは授業参加のミーティングの過程である。

予習の過程には、大きく分けて4つの段階が

ある。まず、学生が課題を読み、語彙、主張、話題を理解する。次に、学生が読んだ課題を自分自身や今まで自分が得た知識に関連づける。その段階を終えたら、学生が課題を評価し、授業参加のリハーサルをする。ミーティングの過程も4つの段階に分けることができる。まず、授業でのディスカッションがスムーズに進められるように学生をグループに分け、雰囲気をつくりあげる。次に、ディスカッションを3段階

に分けて行う。第1の段階は、各グループごとにメンバー間で自分の語彙の理解、主張の理解、話題の理解の順に話し合う。その次に、課題が自分自身や自分の持っている知識にどう関連しているのかをディスカッションする。最後に学生たちが課題とミーティングの進行を評価する。

このLTD学習法がすぐに応用できるよう、安永教授に具体的なステップを教えていただきたい。すでに経済学部1年生の基礎ゼミ等で実施されている。やる気を起こす学習法として学生の中にLTD学習法は高く評価されているようである。(経済学部 エドウィン・アロイアウ)

LTD教授法学習会に参加して—学習技術教育の意義

今まで私は、論文の書き方、資料の検索の仕方等の「学習テクニック」については、ゼミ生が論文を完成させる過程のなかで話すようにしてきた。そのことによってはじめて学習技術は身につくと考えてきたからである。それだけに一年生の初期に、しかもノートの取り方や家庭学習の仕方、発表・討論の仕方、そして自己紹介の仕方まで踏み込んでやろうというのであるから、少なからず衝撃を受けたことは確かである。

私も「研究マニア」として育ったひとりであるが、この「学習会」への参加を契機に「学習テクニック」の教育に少なからず興味をいだいている。

1つは、この学習法は、これまで半ば諦めかけていた「対人関係スキル」を磨く上で重要な役割を果たすと考えるからである。私が担当するゼミ生をみて感じることだが、卒業間際になってやっと学生同士の気心が知れるようになるようであるが、もっと早くそうした関係ができ

ないものかと日頃考えてきた。3年生の6月頃、国会図書館で資料・文献の「検索実習」をすることになっているが、ほぼ全員が参加していることは興味深い点である。2つは毎年の授業アンケートにみられるように「家庭学習」のなさは深刻な問題である。この技術教育によって問題解決の糸口を見出すことが出来るのではないだろうか。家庭学習の問題を克服するには宿題若しくは試験を課すことも1つの方法ではあろう。だが今最も必要なことは「個人学習の楽しさ」を知り学生自らが勉強したいという「学習意欲」を高める教育である。

今年度からはじまった1年生を対象とする基礎ゼミでは、ゼミ生の問題意識の形成と学習テクニックの教育をどのように捉えるか、問題はそう簡単ではなさそうである。だがこの「学習テクニック」が、学生のみならず「研究マニア」ととっても興味深いものであり、この機会にゼミ生とともに学んでゆきたいと思う次第である。

(経営学部 植田欣次)

FD Frontier

新聞や雑誌に掲載された内外のFD関連のニュースのダイジェストやFD関連図書の案内をするコーナーです。

大学における新しい評価の試み(2)

だいぶ間があいてしまったが、Linda Sandersの小論を参考に、前回(No.7)に引き続いて、アメリカの大学で注目されている評価方法を紹介しよう。

1) プレゼンテーションや作品の評価 (Performance or authentic assessment)

講義中心の授業でも、レポート課題の内容について発表を課すことがある。けれど、レポート自体の出来に比べて、発表が成績に占める割合は小さかったのではないだろうか。たしかに文字として残るレポートの方が評価しやすいし、大学の講義に相応しいと思われていた。しかし、自ら学んだ知識をいかに活用するか(特定の相手にどう伝えるか)、その活用能力、訴求力を評価しようとする試みが近年注目されている。学んだことを模擬法廷や模擬授業などで十分に発揮できるかどうかを重要な評価基準とし、しかるべき配点をするのである。

2) ポートフォリオ (Portfolios)

ポートフォリオは学生の学習履歴ファイルのことである。プリント、宿題、クイズ、ワークシート、感想文、その他、学生が講義で取り組んだ学習の成果を紙束のようにまとめておく。学習の進捗が跡付けられて、学生の振り返りが容易になる。この意味で学生自身の自己評価の方法として注目される。教員は講義の節目にポートフォリオを提出してもらうことで、学生の内容理解や学生の学習の状況を把握して、次の指導の手を打つことができる。試験の結果だけでなく、平常点を考慮する教員にとってポートフォリオは一考に値するのである。むしろ、有効な活用には学習成果に対する基準を立て、課題や宿題の位置づけや評価基準を明確にする必要がある。

最近の新聞から

読売新聞に連載中の「新日本語の現場」にこんな内容の記事が載った(4月23日付)。

—必修「技法講座」で能力向上—

高知大学(学生数約四千人)では1997年度から「日本語技法」の講座を必修科目にしている。講義の目的は論理的に書いたり、的確に表現したりする技術を習得することで、人文、教育、理、農学部的一年生全員が半年間受講しなければならない。

「最近の学生はレポートも満足に書けん、あかんなあ、と嘆いているだけでは仕方がない。き

ちんと対応してやろうと思ったのです」。松永健二・人文学部長（57）は、開講のいきさつを簡潔に説明した。この講座を担当するのは日本語学や国文学などの教員に限らない。ほぼ全員で当たる。「大学教員は研究論文を執筆したり、学会で発表したりする経験は豊富です。より実践的な講義ができるはずと期待しました」（中略）。「日本語の知識がないわけではなく、表に出すすべを知らないだけ。その誘導路となるのが日本語技法の講義なのです」と力を込めた。

本学でも共通科目（共通基礎）の中に「文章表現法」が新設された。その成果を大いに期待したい。ただ、創大生の日本語力向上を科目担当者だけに任せてはなるまい。高知大学のように、ほぼ全教員が担当するかどうかは別にしても、あらゆる機会を利用して私たちの学生を鍛える努力は全教員で共有したいものである。

CETL職員紹介

今年度からCETLに職員が配置されました。昨年度まで大学院系にいらした滝川満子さんです。自己紹介を兼ねて、初めてのFD専属スタッフとしての抱負を語ってもらいました。



滝川 満子
(たきかわ みつこ)

大学職員となった時、「教務課は学生さんから嫌われるそうだから、できれば避けたい。」と思っていたところ、通教教務、エクステンション（教職）、学部授業運営、大学院担当、と教務畑を徹底して歩むこととなりました。

旧教職資料センターにいた時。創立者の示された「教育の世紀」を実現するために、勉強に打ち込む教職志望の学生さんの真摯な姿に出会

いました。勉強の合間に心を癒してもらえたと、観賞用のグッピーの飼育に、つつい勤しんでしまいました。CETLに熱帯魚の水槽が設置されているのを目にした時、寝食にさく時間を惜しんで勉強と格闘していた学生さんたちの姿を想起しました。

CETLでは、優秀な大学院生の皆さんを中心に学部生へ真心こもった各種講座を中心とした学習支援が充実しております。またFD分野においては坂本センター長、関田副センター長が力強いリーダーシップを発揮されています。過去3年間の堅実な実績を基盤に、創大生が一人も洩れなく勝利者になっていくための学習支援、“学生中心”の創価大学ならではの特色ある教育がさらに開花していくことを念頭に置き、専属職員として、努力していきたいと思います。今後の発展のため、教・職・学すべてのみなさんのお知恵を広く寄せていただければ心強い限りです。（内 2146）

Information

F D 講演会のお知らせ

「大学教養教育の現状と将来」(教育・学習活動支援センター主催)

講師：国際基督教大学 立川 明 教授

開催期日：2003年5月26日(月) 午後3時30分～5時30分

場所：創価大学A棟427教室

F D 関連セミナーのお知らせ

当センターでは、F D 関連セミナーへの本学教職員の派遣を考えています。ご関心のある方は、5月26日(月)までセンター職員の滝川(内線：2146)までお願いします。

・私大連「大学の教育・授業を考えるワークショップ」

開催期日：2003年8月4日(月)～8月6日(水) 2泊3日

場所：グランドホテル浜松

・「協同学習スキルアップ・セミナー」

開催期日：2003年7月21日～25日—7月28日～8月1日(4泊6日)

場所：アメリカ・ミネソタ大学

* その他、先生方が参加したい研修会等がありましたら当センターまでご連絡ください。

C E T L の窓口業務変更のお知らせ

4月より窓口業務の曜日と時間に変更になりました。

火曜日～金曜日までの12時30分～17時。

編集後記

先輩が語る新入生向けの学習ガイダンスは学生中心の創価大学に相応しい試みだと思います。学ぶ意欲に溢れる新入生の姿を見て、教える側の姿勢と準備が改めて大切だと感じました。(U)

C. E. T. L. Quarterly No. 10

編集・発行

創価大学 教育・学習活動支援センター

〒192-8577 八王子市丹木町1-236

Tel : 0426 (91) 9782 内線 2148

E-mail : cetl@soka.ac.jp